
二回目の再会

山口樹懶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二回目の再会

【Nコード】

N8488H

【作者名】

山口樹懶

【あらすじ】

男は、最先端コンピュータのモニターをすることになった。コンピュータを使っているうちに、彼の頭の中には一人の幼なじみが浮かんだ――
それはやがて回想となる。

1章 bounty(Jul. 27th. 2009)

n. 【bounty】

1 「人への」気前のよさ、恵み深さ

2 (貧者への) 施し物、恵み物

目覚まし時計が健気に叫んでいる。

ぼくは本能的にその金属音の十六連打を嫌悪して、思わず発狂しているように叫んでしまう。

目覚まし時計にまともな音はないものかと自分に問うが、どうしようもない。自分に問ったところで何が解決するというのか。

そもそも、この大嫌いなリズムのおかげで毎朝起きることができている。その点は感謝しよう。

目覚まし時計の周りを適当に数回叩くと、ベルは死んだ。ただ、数分後には生き返る。身構えていなければならない。

明るい木目調のフローリングが敷かれた六畳という、それほど狭すぎるわけではなさそうな部屋。奇麗で無機質なステンレスの柵がついたシングルベッドでぼくは夢から醒めたらしい。真つ白の壁紙も相まってSFに出てくる刑務所を連想させる部屋だった。

——醒めたらしい、というより、醒めた。まず間違いないいつもの朝だ。気力が出てこないのではらく目は閉じることにする。

ぼくは横を向いて寝ている。人間に生まれた性というべきか、胎内に収まろうとしているかのように軀の各部を折り畳んでいる。

枕と頭の間に挟まれていた右耳が体温で暑くて不快だった。でも眠くて寝返りを打つ気さえ湧かなかった。灰色のスウェットを着ている全身も暑い。

もう二十代後半もいいところだ。全身が重くなりはじめたうえに、若者らしく爽やかではあった体臭がじきに中年の毒ガスのような体臭に切り替わるはず。

しかし暑い。汗をかき続けるべく。

まだ起きられまい。昨日気分を切り替えて一気に部屋を掃除したからか、部屋はまるでコンピュータが並ぶオフィスのように整頓されている……はずだ。

目はまだ開けない。

オフィスどころか、まるでハイテク工場のクリーンルームのように無機質かつ殺伐とした印象を受けるほどとにかく汚れけが一つなかった。どこを見ても無垢としかいいようのない部屋。

目を閉じているので——脳裏には昨日の深夜の部屋が思い浮かんだ——

外で鴉が鳴いた。都心を忙しく飛び回るそれよりは落ち着いた鳴き声だった。

頭の周りを必死に手で探る。まだ牀の筋肉は起ききっていないので視界はない。手にプラスチックを感じて、掴む。

そうだ。これこそぼくが求めていた、薄型テレビのリモコンである。

機能が満載されたそれはとても大きくて長かった。それと、重い。電源ボタンはこれか——いや違う、消音ボタンだ。電源が点いていないのに押してどうする？ ボタンを探りに探り、日の丸のように立派な円形のボタンを押した。

電源が点いていないときに押した消音ボタンに効果はなく、まぶたを閉じた暗黒世界にニュース番組の占いコーナーの音声の流れ始めた。

テレビ局自慢の美人女性アナウンサーが、退屈になるぐらい早口で占いの順位を告げる。

アナウンサーは大急ぎで、時折囁みながらも、健気に読んでいるようだ。……と思えばすぐ読み終わっていた。

ぼくは特別それに興味があつたわけではないので、三位がしし座十位がやぎ座、十二位がいて座ということしか聞き取れなかった。

占いの終了をもってニュース番組が終わると、また新たにニュース番組のようなものが始まった。

「おはようございます。七月二十七日月曜日です。えー、本日は緊急ニュースといたしまして、インド郊外でのテロリストの武装蜂起について――」

つまらない洋画よりは国際ニュースのほうがまだ元気が出る（もつとも、ドラマとかアニメが一番好きだが）、だからそれを点けていよう。

でも、ぼくにとってドラマ以外の番組は単なるBGMに過ぎないから――あまり気にして注視することはない。

「今回の暴動で、現在はイスラム原理主義テロリストのグループとインド軍、パキスタン軍、警察の銃撃戦となっていて、死傷者は十数名――」

国際ニュースの画面が少しずつ見えてきた。目が開いていき、首がゆっくりと曲がって視線は薄型テレビへ。

明るいスタジオ。眠気をまるで疎外するような出演者のはきはきとした声。それらはまるで会社の食堂で観る昼のニュース番組の雰囲気だった。その雰囲気脳が反応し、次第に部屋の中の様々なものに意識が回るようになった。気付くとぼくは完全に眠りから目覚めていた。

夢から醒めても、ぼくの脳は決してニュース自体に意識を向けようとはしない。

「そちらで現地のホテルに滞在している方と電話が繋がっております。御冷^{みひえ}さん？」

……何もしてないのがいやになる。朝食を食べよう。飯だ。

でも、何も急ぐ必要はない、会社に行く必要もないのだから。

鴉の鳴き声はさらに落ち着いたものに変わっていた。雀の鳴き声が横入りして、少しあとにはそのほうが激しく鳴いていた。

月曜日にもなって、会社員であるはずのぼくが休まなければいけない理由とは悪いものではなかった。それは日常生活において、我が社が開発した試作品の試用、つまりモニターだ。

その間の分の給料はある。だから、この状況は有給休暇の四文字でわかりやすく説明することができるかもしれない。「休暇」なのかどうかは疑問だが。

いったい何の縁があつてモニターに抜擢されたのかはわからないが、とにかく我が依田電機よだの最新鋭ヘルメット型ヘッドマウントコンピュータを使えるのだ。楽しみにはなる。

いつ届くのだろう。

玄関の高級そうに見えるドアから不自然に盛り上がったポストには、不在通知その他の類は入っていないかった。

黒を背景として高級感を醸し出しておきながら、やはり高価なメニユーしか載っていない寿司宅配のチラシ。

不動産の値段が印刷された安っぽいわら半紙。一口に高価といえるレベルではない。

変な請求の紙は無かった。

電話に留守番電話は蓄積されていない。着信履歴にも宅配便と思しき番号なし。やはりまだコンピュータは来ていない。会社から到着日時は知らされていない。

宅配便とは届くまでが待ち遠しいものだ。それが素晴らしいものか憎むべきものなのかは別にして、その待ち時間に何をすればいいのか考えてみる。

……たった今来ていたら？

と、ふと思いついて、ドアに埋め込まれた小さな穴から玄関前の光景を覗いてみる。潜水艦の潜望鏡を彷彿とさせるその穴の奥には手すりがあった。これはマンションだから当たり前だろう。

今日は珍しく鳩の糞が見えない。これは鳩の糞がなくなったのではなく、鳩の側が糞を見えない場所に投下する技術を身につけた、とどのつまりそういうことだ。だいたいそういうことだ。

人間と鳩の糞闘争は、人間が新技術を発明したところで鳩がそれをすり抜ける術を見つける、いわば抜きつ抜かれつの技術競争状態にある。

誰もが思っていることだろうが、糞という名の新型爆弾を街中にばらまく鳩は平和の象徴などではない。

鳥類最強にして最悪の爆撃機部隊といってもいいかもしれない。

振り向くと、時計の二つの針は八時二十分を指していた。

時計界では見た目が美しい「黄金比」とかいわれるらしい十時十分とは上下対称の関係にあるが、ぼくは八時二十分を指す時計を見て動悸がしたような気がした。

それは美への反感か？ 時間への恐怖か？ でも先には何も迫っていない。あるいは予言とかそういった第六感か？ はたまたこの先地震か何か起きるのか？ ぼくは心配になりながらも、何か別のことを見つけようとした。

あいにく、ぼくにはやるべきことはおろか、もてあましている時間を活用する術さえないようだ。これは前から予想してはいたが、実際その場面に出会って荒野に放り出されたような異様な寂しさを覚えた。

しばらく黙り込んで、テレビも消して瞑想にふけていると、インターホンが鳴った。瞑想の結果は何も生まれなかった。

言っておくと、これは瞑想であって、妄想などではない。変に勘違いされては困る。

くだけた言い方をすれば、ぼうつとしていただけだ。

チャイムの柔らかい音が鳴り終わる頃にインターホンの受話器を取り上げ、「はい？」

「田熊急便です」五十代くらいの男か。いかにも温厚そうな声だった。玄関に向かって歩いていく。

「はい」

印鑑を探す。都合良く、玄関の目線の高さの小さな棚にシヤチハタが立っていた。その所在を確認すると、ドアを開けた。

配達員はぼくと目を合わせて柔らかい表情で、「えー、はい、こちらがお届け物になります」

何も悪いことはできないような顔だった。

かなり大きく、一人暮らし用の冷蔵庫なら入りそうな大きさの、荒っぽい茶色のダンボール箱が持ち上げられた。そして少しぼくのほうに寄せると、申しわけなさそうに配達員が言った。

「すいません、すいません。ちょっと荷物が大きいですね。大丈夫ですか？」

「あ、大丈夫です」

試しにぼくは箱の側面を両手で掴んで持ち上げてみた。重かったが、見た目の割には軽かった。でも重かった。

総評して――重い。

「えーと、清水裕信さんでいいですね？ 印鑑をお願いします」

伝票が差し出される。

ぼくは後ろを振り向いてシヤチハタを取った。キャップを取って、伝票の印鑑を押すべき部分の裏に指を当てて、その反対から印鑑を押した。奇麗に明朝体で「清水」と押すことができた。少し嬉しかった。

荷物を少し玄関のほうに引き込むと、配達員が言う。

「はい、ありがとうございます」

配達員は親切なことにドアを閉めてくれた。ぼくが鍵をしめて、荷物に一瞥くれた。

さつき一人暮らし用の冷蔵庫なら入りそうな大きさだと言った。
あと、別に例えるとすれば――？ 中学生とかそのぐらいなら一人
は入りそうなものである。小柄な女なら入れる――？

例の六畳部屋に荷物を運び込んだ。

気付けば、茶色のダンボールの端には小さく控えめに、優しい印象を与える丸ゴシック体で＜依田電機＞と印刷してある。

うちの会社でこんなデザインのダンボール箱は見たことがない。
よほど期待されている新製品なのだろう。

箱の上面のふたの部分を伝票が覆っていた。その伝票がひどく汚れていて、見ていて気分のいいものではなかったし、剥がさない限り箱は開けられないようなので、伝票の剥がれかけている部分を思い切り引っ張り、剥がそうとした。

これはかなりの粘着力である。思わず剥がすときに苦勞してしまった。

この粘着材は伝票を貼付するためではなく、鼠とかごきぶりを捕るのに使ったほうがいい。

もっと力を込めて引くとダンボールの一部が崩壊して、中ほどにある波状の構造が見えてきたので、ダンボール箱のふたを開けられるように伝票を律儀にはさみで切った。

一部を剥がしかけて、途中で切った伝票はさすがに見栄えが悪い。もはやグロテスクといえる代物であった。

中には、プチプチとよく呼ばれるビニール製の衝撃緩和材、発泡スチロールでできた直径二センチぐらいの球体、新聞紙がいっぱい詰まっていた。これぞ適当梱包の極致。

それらをかきわけると、まず折られた説明書が出現した――発掘される化石のように。

それも、A4サイズの紙数枚に印刷されており、その端の一端を一つのホチキス針でまとめられているにすぎない説明書だった。

密かに気合いの入ったダンボール箱とは大違いで、どこにも気合いの欠片さえ見出すことができなかった。

粗製濫造、いや、試作品なので濫造しているわけではないと思うが、粗製であることは明らかだった。

とりあえず、ぼくは説明書を読まなければ機械は使えない質で——それに加えて未知の新製品なので——熟読してみることにした。熟読というほどの量はないが。

表紙には＜DNR0081説明書＞と表題がある。ただ、それだけが一文字二センチ四方ぐらいの大きさの明朝体で印刷されている。印刷全体は安っぽい乾いたトナーではなく、気品を伴った光沢があるインクジェット印刷。かなり少数の生産だったのか、それとも偶然に説明書の原本が付属したのか、そのどちらかだろう。

表紙をめくった一枚目の一行目には、＜説明書＞としか書かれていない。こちらはとても小さいあまり可愛らしくなっている明朝体で。

次の行に書かれている、型番らしき文字は——

＜DNR—0081B＞

＜DNR—0081W＞

＜DNR—0081S＞

——それぞれ、ブラック、ホワイト、シルバーといったところか。というより、それ以外ぼくの思考では思い浮かばない。これはW、即ち白らしい。

最初のほうの気持ち悪いくらい丁寧かつ穏和な文は無視する。

大きいゴシック体で書いてある、「付属の冊子をお読みください」とかいう旨の記述が目に入ったが、冊子など付属している気配がない。

説明書の文章はところどころ読点が抜けて、ひどく投げやりな文章に思われた。

使い方は、まず、”スクリーンフィールド”なる蚊帳のような形をした白い小型テントを設置し、その中に入って、真っ白の、バイクのフルフェイスヘルメットのような形をしたDNRを被る。それだけで動作するらしい。

説明書の最後のページを開いたまま足許に置く。

説明書というよりは、数枚の紙。数枚の紙を置いて、刹那に思いを馳せる。鴉はそのとき鳴かなかった。

突然大きな疑問が突発的に頭の奥を駆けめぐった。それは単純で、今ごろ思ったのが不思議だった。DNRで何をしろというのか？
いまいち今までのコンピュータと機能がおおかた同じだとは思えない。

”次世代ゲーム”を遊べたり、4D映像の類を観られるのだろうか。

あるいは――ぼくがテレビで見たことがある活用方法だと――架空世界を歩き、その中で物を買ったり人とコミュニケーションしたりできるかもしれない。

まあ、この製品は安全ではない、と言われたわけではない（安全だという確証もないが）。今のうちは会社を信用してこれを使おうと思っている。

……それでもまだ、ぼくの頭の中には緊張と不安と疑い。

何故かというと、ぼくは得体の知れないものを目の前にしているうえに、それを使おうとしているから。

得体の知れないものを使うのは、まあ勇気のいることだ。

これを言うとは負けになるかもしれないが――場合によっては命も懸かっているかもしれない。

まだまだどうも落ち着けそうにないので、しばらく部屋の外の音を無意識に聞いていた。

意識の焦点をドアの外の世界に向けた途端、実にさまざまな種類

の音が聞こえてくる。

生活音、騒音、はたまた単なる雑音。それらは意識の向けようによって調和して交響曲のように聞こえるときもあれば、全く調和せず音が交叉しあって不協和音を奏でるときもある。

要は環境音をどう聴くかによって、芸術性やら何やら、そういった要素がめまぐるしく入れ替わるのだ。

しかし今のぼくにとっては、それは見事な協和音とも不協和音ともいえず、完全に生活の中に組み込まれている。

まあ、誰だっておそらくそうだろう。よほど感受性の強い人でないと、雑音は楽しめないのだ。

先ほどから目眩がひどい。世界がスローモーションに変わった。

雑音は、

車がエンジンを吹き鳴らす音、

タイヤがゆっくり回る音、排気がマフラーなる排気口で静かに唸る音。

犬を連れて散歩をする人の音、

柔らかめの靴がコンクリートと擦れる音、犬が小さく吠える音。

目眩が治まってきた。そして、些細な音に耳を傾けていると、やはり些細なことでも簡単に気付くことができるようになるものである。というよりは、むしろ「何故ぼくは今まで気付けなかったのだろう？」と疑問を抱いてしまったが。

そう、ぼくは説明書の最後のページの端のほうの、ボールペンで小さく書かれた文字に気がついた。何故今まで気が付かなかったのか。

顔を近づけて読んでみる。すると、心拍数が上がってきて、恐怖、または気分が高まっていくのを感じた。

その字は女性的で曲線的だったが、また同時に達筆な印象をも受ける不思議な字だった。

「あの気持ち。あの気持ちがあったから、これが完成したんだよ？」

その一文を見て、すぐにぼくは一人の少女を思い出した。違う、同じ年だから今は「女性」か。

そういえばもうすぐ誕生日だ。

幼馴染みだったが、中学を卒業する頃に別れてそれから一切連絡をできていない、あの人。筆跡も同じといって過言ではない。

品が良く、無口で人見知り。それでも、僕のことを好いてくれた。僕も彼女を好いていた。

ちばあやな
千葉文奈。いつも同じ髪型で、服装も地味だった。

だが何か彼女には惹かれるところがあった。不自然ではない無表情の醸し出すアンニュイな雰囲気か？ 無口ながらも憎めないその性格か？

その性格を持つ、心が簡単に読めない、不思議系の文奈でないとこの文は書かないだろう。いや、書けまい。それはわかった。

自分で言うのもなんだが、彼女はぼくのことを愛してくれた唯一の女の子だったからだ。

しばらく一文を見つめる。

「あの気持ち。あの気持ちがあったから、これが完成したんだよ？」

まあ、見つめても文章は変わるまい。

文奈がこの一文を書いたならどうして？ 何故書いたのか、何故書けたのか？ どういった意味があるのか？ 謎は深まる。そうしてぼくは気付いたときには酷く咳込んでいた。

また目眩がしてきた。世界がスローモーションに変わった。

時計に一瞥くると、

もう九時——起きてから一時間ぐらい——

ぼくの右手は勝手に動き出して、

テレビのリモコンに手をかけて、

これまた大きく自己主張の激しい電源ボタンを押す。

テレビでは洋画のような雰囲気ドラマが放送されていたが、

ぼくは興味がないので、

注視はしない、

だから、

ジャンルもわからない。

そういえば、

興味がないなら、

どうしてぼくはテレビの電源を入れたのだろう。

「あの気持ち。あの気持ちがあったから、これが完成したんだよ？」

一度この文に出会ってしまうと、ぼくの行動一つ一つが不思議で、何か深い意味があるように思えてしまう。

あの文は、まるで今まで平凡な生活を送ってきた、人生貧者への施し物。恵み物でもある。ぼくの人生に事件が起こるのなら――歓迎していないといったら嘘になる。

全くこれは気前のいいプレゼントだ。

というふうには、ぼくは感心してしまった。しかし全く不覚だった。鴉の鳴き声はもう完全に聞こえなくなった。

目眩も治まった。

考え事をしていたら、もう十時だった。過ぎる時間が虚しいのか、楽しいのか。まだわからない。

……明日は、DNRに挑戦してみるか。ただ、

DNRとあの一文が同時にこの世界に存在していること自体が矛盾しているように思えてならない。

2章 l e v i t y (J u l . 2 8 t h . 2 0 0 9)

n. 【l e v i t y】

1 「おおげさに」軽率、無思慮、場違いな陽気さ、気まぐれ

D N Rが届いだ次の日。あの一文はどうしても忘れられない。

「あの気持ち。あの気持ちがあったから、これが完成したんだよ？」

昔。中学卒業の頃、文奈と別れてからずっと寂しかった。死にそうなほど。

そのぐらいいくにとってもかけがえのない存在だった。

実は、という必要のあることかはわからないが。

こういう人は普通全然いないと思うが——電話とか手紙は、とても仲が良すぎて逆に必要なかった。

一応電話番号や住所は知っていたが、毎日会っていたから電話をかける必要も手紙を送る必要もなかった。

文奈が遠くに引っ越すことになって別れる頃には、電話以外の連絡手段を訊き損じてしまった。

当時の連絡網も今は灰と化している。

だから今は音信不通。

……そういったことにいつまでも拘るわけにはいけないので、今日もぼくは目を見開いた。

昨日と同じ午前八時前後を壁掛け時計が示す。

心臓からつま先や首筋まで段階的に神経が覚醒していき、睡眠の緊張からぼくの軀は解放される。

カーテンの隙間から射し込んでくる白く暗い日光が部屋を照らして明るくしている。

ただそれだけに反応して、そのちょっとした出来事が怖くて落ち着けなかったこと以外は、自分でも不思議なほど落ち着いていた。

それは、待ちに待っていたDNRが昨日既に届いていたから。ぼくの軀を包むマットレスを二枚敷いてあるベッドが心地よいのもあるだろう。でもDNRが届いたのが大きい。

そう。今まではひたすら待っているものがあつた。だから落ち着かなかった。

でも、それが届いた今は、もう落ち着いていた。

……でも無理だ。落ち着けない。

ぼくはこれからDNRを使うことになる。それを考えるとぼくは落ち着けない。

千葉文奈はぼくを落ち着かせてくれない——それもいろいろな意味で。言葉では説明し尽くせないほどの語意がある。

空から飛んできた自分の棺に乗って天に昇るような気持ちだ。

例の説明書はさすがに小さい薄型テレビの上には置けず、とりあえず一辺が一メートル前後の四角くて黒いテーブルに置いてある。テーブルのデザインは布団とヒーターがついていない炬燵といえどもまさに的を得た言い方というか、うまく表現できている気がする。左上の端で数枚の紙を一枚に綴じているホチキスは取らず、律儀にまとめたままにしてある。

DNRはもう誰も来る予定のない玄関に放置。

部屋には物音一つ聞こえてこない。不気味を通り越して全く愉快であつた。

でもDNRの存在のせいでテレビを見ることが馬鹿馬鹿しく思えて、今日、テレビは見たくもない。だから見ない。自己主張の強い電源ボタンは悉く無視する。

突然、その静寂の中一つ思いつく——今日中にDNRを使ってみることにするか、と。

そう思ったのち、不覚にも説明書の最後の一文とDNRの関係を一瞬考えてしまった。

頭の中に蜘蛛の巣が隙間なくきめ細やかに張り巡らされているような、どうしようもない感情に襲われた。その感情は天文学的な量の膨大なストレスの産物だった。

そういった頭の重さがいやになって、それは自然消滅するだろうと考えて——少しでも早くときが進んでほしかったから、カーテンのわずかな隙間の外に少し目を向ける。

ゆっくり見上げていくと、それほど高くないビルの一部、何もない空、雲が少しある空がそこにあった。

最後、頂上に君臨しているはずの太陽はカーテンレールに隠されて見えなかった。

見れば眩しくて、数秒の間視界に日の形が焼け付くだろう。だから見えなかったほうがいいのだろうか、それとも見てエネルギーが何か受け取ったほうがいいのだろうか。エネルギーなどないか。

悩んだ末ぼくは見なかった。何はともあれカーテンの外は極めて日常的で、見れば見るほど安心した。

日常を視ているぼくの頭の中でDNRの存在は殆ど非日常へと変わりつつあった。対比効果か。

いつも日暮らしの日常が普遍的すぎて、少しでも変なものばくの頭の中では即座に異端となってしまう。

繰り返し言うのもなんだが、例の文を読む度に自分が心配になり、その存在に日常が見出せなくなった。

時計が気になって眺める。八時半。そろそろ、か。全ての日常からぼくが隔離されるべきときは。

文奈がDNRを開発していれば、今ぼくは文奈と同じ会社に勤めていることはほぼ間違いない。こんなものを開発するとは文奈も出世している。あの無口人見知りで少し天然の文奈が変わったものだ。しかしぼくは、文奈の何に感心してしまっているのだろうか？

狭いが整理整頓が行き届いていることで名高い、あの六畳部屋。

そのわりと広いところにスクリーンフィールドなる純白の蚊帳を設置してみた。扉がないので中に入るために最後の一面は組み立てていない。完全に組み立てると入れなくなる、というのは重大な欠陥だ、そのうち報告せねば。

蚊帳の大きさはだいたい二メートル四方の立方体。だから少し家具をずらす必要があった。

黒いテーブルは立てかけたり、

A4サイズのノートパソコンとかプリンターは玄関に退避させたり。

スクリーンフィールドは家具・家電の配置を中途半端に変えてしまった。

そのスクリーンフィールドは軽い金属のフレームで形を成して、それに妙にざらざらとした材質の分厚い布が張られている。本式の蚊帳のように透けたりはせず、光もあまり通さない。

その見た目は「蚊帳にしては」モダンで、「コンピュータの周辺機器にしては」クラシックなつくりだった。

ダンボール箱を頭から被って女に捕まるより、この不思議な蚊帳の中で死ぬほうがまだいい。

説明書に電源コードを繋ぐべしと書いてある電源コネクタは下方の端にあった。まだ心配なので今は繋がらない。心の準備ができれば。

ところで

本体

要するに

”DNR（ヘルメット型）”は

すぐ近くの

スクリーンフィールドの許に置いてある

DNRを見つめた途端、精神が破綻した。昨日より目眩がひどくなっているらしい。ぼくは動悸や目眩、立ち眩みといった貧血の代表症状を起こして倒れかけた。

ただし、右腕から背中へ、絵に描いたように上手く受け身をとることができたから完全に倒れたとはいい難い。それでも、貧血の症状のせいで倒れた瞬間反吐が出そうになった。

気道まで胃液が流動し、口から出る前に閉鎖された喉で止まった感覚。実際そうではないにしても、そんな感覚がする。

胸を叩けばすぐに口から排出されそうな感覚。

昨日でストレスが一気に溜まったのか。

それとも、だいぶ前から溜まっていたのか。

ぼくが倒れても、何も言わず寡黙に居座っているDNR。白く奇麗に光沢する本体表面もバイクのフルフェイスヘルメットそのもの。そのDNRがとても重厚に見えた。持ってみると実際の重さは二キログラム弱といったところか、見た目に反してかなり軽い。

軀をゆっくり起こしたが、右肩が痛い。コンクリートの壁にタツクルしたような痛みだ、ただ、かなり痛いものでもない。耐えようと思えば平気。

DNRなら痛みを消せるだろうか？

DNRが痛みをつくるのだろうか？

それは使ってみなければわからない、今日日には。

ぼくは決意して、いよいよ準備に取りかかることにした。

いきなり準備しろといわれても、こんな文明の利器を準備するのは――手順に沿っていなければ――少し気が引ける。SF映画のように緻密に体系化され、何をするにも手順がある世界。そんな世界に、ぼくは入ったように思われた。

説明書に簡素ではあるが手順が記されていた。

その手順も文奈らしいといえば文奈らしかった。ここは文奈に従おう。

まずは乾ききった蛇の抜け殻のように曲がっている電源コードをコンセントのプラグに繋ぐ。「コンセント」――語源が不明な和製英語、なるほど実に不思議な言葉である。不思議。

そして、スクリーンフィールドの、電源コードを繋ぐべき黒い穴にコードを繋いだ。

ワインの瓶の口にコルクを詰めるような、どこか詰まったような感触。すると、パソコンを起動したときに鳴るような冷却ファンの上品なモーター音が鳴り始めた。それ以外は光らなければ音も出なかったし、動きもしなかった。

どこが作動しているのかと疑問に思っただけスクリーンフィールドの周りを一周してみるが、表面の白い布全てから均一に音が出るように、どこかの部品が出している音ではないようだ。

使い方を覚えきれていなかったぼくは再び説明書を読んだ。

1 ― 蚊帳型スクリーンフィールドを設置し100V50／60
Hz電源をスクリーンフィールドに接続してください

違う。そうじゃない。

2―スクリーンフィールドの中に入りフィールドの密閉を確認してから本製品を頭から深くかぶってください

中に入ってどう密閉しろというのだ。試しにDNRを右手に持ってスクリーンフィールドに入ったところで何か起きる気配はない。汗も何もない、水分が存在しない世界で砂漠に放り出された気分だった。

文奈、どうすればいい？ 昔はよく「のぶ、どうすればいいの」って遠慮がちに訊かれていたけど。今はぼくのほうが機械音痴になったみたいだ。どうすればいい？

「あたしだってわからないよ。ねえ、どうすんの？」

そう訊かれてもぼくはわからない。

「のぶしか訊ける人がいないから訊いてるの」
ぼくだって文奈しか訊ける人がいない。文奈以外にこれを解決できる人がいるとは思わない。

「じゃあね、えーと……適当、でいいと思う」

適当、か。

適当、ね。

そう頭の中で繰り返し何度か唱えて、スクリーンフィールドの一つの面を持ち上げてみた。二メートル四方、重さ一キロ弱。アルミのフレームを囲んで障子のようにナイロンの繊維が張られているから、ヨットの帆のように表面は揺れている。

ゆっくりと、内側から最後の面を塞ごうとする。ただ自分の手が邪魔で密閉はできない。元の位置にスクリーンフィールドの面を寝かせて、別の方法を考えた。

単純化だ。原点回帰しろ。

思考を巡らせていると、何か機械が落ちるような音がして、ぼく

が入った箱は密閉した。

明るい。それが第一の感想。でも、急に閉まったんだろう。

そんなときには、

「気にしない、気にしない」

と、いつも文奈は言っていた。今はそれで正解かもしれない。とりあえず胡座をかいて、スクリーンフィールドを被った。この際思索や躊躇は関係ない。勢いも必要だ。

ヘルメットのシールド部分を閉じると、数秒後、そのシールドにある映像が映された。

正午ごろの、どんよりした空。一気に心理状態やテンションが静まる雰囲気。

ため息をついてその乾いた空気を吸うと、音も聞こえる。

それは周りの音。砂嵐ときどき雷、のち雨。

次第に砂嵐は消えて、雷のち雨。

体の感覚が覚醒した。体のあらゆる部位がさまざまな感覚を受け取る。空気と触れる感覚、コンクリートを歩く感覚。

乾いた空気は濡れた空気に変わった。

そう。

あの頃の、

大人ではない頃のあの町。

ヘルメットを被っただけなのに。文奈は——こんなものを生み出してしまったなんて。

体全体に雨が当たって、体温が下げられた。

雨を吸って重くなった詰襟の制服が気持ち悪い。

そして、ついにDNRの真相がわかった。まさか。

まさかこんなものだったとは。

中学校のセーラー服を着て、薄い水色の傘を差している文奈が後ろから歩いてきて、ぼくの近くまで小走りで近づいたところで言った。

「同じ学校で……よかった……ね。嬉しい。中学は同じクラスになれるかな？」

その声は雨に邪魔されて、少し聞き取りにくかった。

泣きそうなわけではないが、泣きそうに聞こえるような声。文奈はいつもこうだ。少なくとも元気なタイプではなかった。

それでも最大限に出す声は小さくなく、国語の朗読のときは声が大きかった。そのときに限っては元気で、聞いていると自然に和んでくる声だった。

「ねえ……のぶっ！ 聞こえてるっ？」……これが文奈の最大限の声。

今日は確か小学校の卒業式、今はその後の帰り道。登校した頃には快晴だったのに、下校するときには最悪の天気だったと覚えている。その状況にどきまぎしながら、ぼくは声を絞り出す。

「う、うん。きっと同じクラスになれるよ」

文奈が急に話題を変えた。

「なんか……制服ってさあ、思ってたより恥ずかしくないなあ」

制服を着て歩く様子が妙に初々しい。幼くも見える所以は、このときの文奈の背が低かったからだ。

最近となると――一気に身長は伸びて、最後に見た頃の、中学と全然変わらない高校のセーラー服を着た文奈は一六〇センチぐらいの身長があったから――今もスレンダーで背が高いのだろう。

文奈が立ち止まってから屈んで、ずり落ちてきた白いハイソックスを片足ずつ引っ張って膝下まで上げた。

「文奈は恥ずかしい恥ずかしい言ってたよね。でも実際そんなもんじゃないだろうって思ってた」

「なんで？」

「みんな着てるし。文奈ってあまり恥ずかしがらないよね」

「あたしがそういうの隠すタイプってことは知ってるでしょ……」

不思議だ。不思議なくらい、あの頃の記憶が蘇ってくる。

「まあ知ってるけど。それにしてもうまく隠すよねえ」

文奈が周りを眺めて目を泳がせた。すぐに心配そうな表情に変わった。

心配そうな表情。

「親と一緒に帰る人多いね」

「そっちのほうがよかった？」

「……のぶと……一緒に……決まってるじゃん……親が来るのは、恥ずかしい」

ここまでくるとぼくはもう完全に確信した、DNRをつくったのは文奈しかない。ここまで完璧な文奈をつくれるのは文奈しかない。

だが……それを知ったところで今何をいえばいいのだろうか。結局何もいえない。

「確かに、そうだな」

「『そうだな』って……今言ったのも恥ずかしかったのに……」

「ごめんごめん」

信号が赤になって、雨の中でぼくと文奈は立ち止まった。十秒に一台ぐらい車が通る。

「あ……」

「ん？」ぼくは泣きそうな文奈が気になった。

「ごめんね、本当にごめん。こんなにびしょびしょになっちゃって

……気づかなかった」

「いや、別にいいよ」

「ほらほら、入ってきて」

文奈のすぐ右隣に立つ。文奈は左手に持った傘をぼくのほうに寄せる。この光景は懐かしい。何か心の奥からこみ上げてくるものがある。よく覚えている。

「左肩、濡れちゃうよ？」

「いいのいいの、手繋ごうよ」と言った文奈の顔は仄かに紅かった。黙って文奈の右手を握る。どう比喻すればいいのかわからないほど柔らかい皮膚の表面に触れる。

「ねえ、なんか

この感じ

懐かしくない？

……そんなことないかな」

こう言われてしまったら――

「いや、懐かしいよ」

こう言うしかない。でも、言ってよかったのだろうか。ぼくは自然に罪悪感を覚えてしまった。

ひどく軽率で気まぐれな罪悪感。本心なのか微妙な罪悪感。

信号が青になって、ぼくは文奈と再び歩き出した。雨の中を、手を繋ぎながら。

ほぼ歩行者天国状態になっている人気ひとけの少ない小道を一步一步歩いていく。

「うーん、なんか不思議な感じがする。毎日会ってるはずなのにね。なんで懐かしいのかな」

「なんでだろうね」適当に答えることにもまた罪悪感を覚えた。

文奈は傘を畳んで少しの間雨を浴びると、突然雨が止んだ。それをぼくが不思議そうに見つめていると、文奈は目を合わせてただ悪戯いたづらっぽく微笑んだ。

「止むと思ったの」

「今日の文奈、なんか変だよ？」

「正直自分でもそうは思ってる。なんなんだろう」

「さあ」

この文奈はDNRのことを知っているのか？

DNRにつくられた文奈はDNRのことを知っているのか？

そういったあたりがとても不思議で、ずっと頭から離れない。

DNRで文奈は何が言いたかったのだろう。

ただそれが気になって質問したくなったが、それがこの世界ではタブーになりそうで。

でも、訊きたくなる。「文奈、なんか今ぼくに言いたいことある？」

「のぶもなんか変じゃん」

「まあ、ね。まあいいから」

「うん、その、えーと……」文奈はこみ上げる笑いを何とか抑えながら、「……大好きだよ」という。

単純すぎて、心外な答えだった。

「え、それはありがとう、でもそうじゃないでしょ」とぼくも笑いながら。

文奈はまだ笑っている。

「じゃあ何ならいいの？ えーと」

「うーん、たとえば――」

「じゃあ訊くね。もしだよ？ もし会えなくなって離れ離れになってもあたしのこと忘れない？」

大声だった。人気がない道だったが、それでも少し恥ずかしかった。

……今、大人になった文奈もこう思っているのか。

しかし、いきなりのこの発言、返事に困った。いや、言うべきことならすぐに浮かんでいた。でも口に出していいのかどうか。

それ以外に返事がないから言う。

「絶対に離れたりしないし、そんなこと考えちゃ駄目だよ」

「そんなこと言って……そのまま……別れたら……あたし、もう生きていけないよ……」

文奈の声は上擦って、目が潤んできている。その状況に慌てて真っ当らしい答えをすることにした。

「ごめん。会えなくなっただとしても一生忘れない」

帰り道がぼくと文奈とで分かれた。

「……うん。ありがと。じゃあね、また中学行くとき会おう」

「じゃあ！ わかった」

3章 e n t i t y (J u l . 2 9 t h . 2 0 0 9)

n. 【e n t i t y】

1 実在するもの、実体

ぼくは仮想世界の中学生生活に慣れて夏休みに入り、D N R のこともすっかり忘れかけていた七月二十八日。

思い出せば、現実世界でD N R を起動したのもその日だったか。

普段カレンダーを見ずに手帳と腕時計と携帯電話で日付を把握している自分だが、奇妙な出来事が起こった日にはまるで人が変わったように日付をすっかり覚えていた。

D N R を忘れた今でも、まるで綺麗な厨房から時々鼠が出てくるように、突発的に思い出すことがある。そして思い出すたびに考える。

現実世界では、あれからどのくらい経っているのだろうか。

しかし、現実で経っている時間が数分であろうが数年であろうが、思索の必要はない。そう思えた。

自分は他のことを考えずに現在を楽しむべき、だと。

毎回そんな結論に至った。

そうしてぼくは自分自身の生活を頭の中で整理しながら、広く極端に人口密度の低い校庭の端にある、ただ一つだけ置かれたベンチに座っていた。

学校指定らしく微妙なデザインをした真紅のジャージ姿の文奈はすぐ左隣に背筋を伸ばして座りながら、太股と太股の間に可愛らしく両手を置いて軀を前に傾けている。

今しているように――ただ一緒にいるためだけに、文奈の部活が

終わった後にぼくは学校に来ることになっていた。

……というわけで、文奈に呼び出されて来たもの――後ろからうなじに照りつける直射日光が熱い。自然に肌から汗が吹き出て、それは空気と触れて温度が下がっていくが、どうも汗より太陽のほうが勝るらしい。

ぼくが密かに苦しんでいる様子に気が付いたのか、文奈は突然口を開いた。

「のぶ？　ここ暑いよね？　違うところでもいいよ？　一緒にいられればどこでもいいし」

「いや、大丈夫だけど」

「でも暑いんでしょ？」

「ぼくは大丈夫」

「あたしが違うところ行きたいって言ったら？」

少しやられた心持ちだった。

「行く」

「……じゃあ行こっ」

しばらく文奈の後を追って歩くが、適当な場所が見当たらないらしく、

「うーん……」といいながら文奈は周囲を見回している。

「もうここらへんでいいじゃん。屋根もあるし」とぼくが指したのは、自転車置き場の割れかけたトタンの下にあるたまたま空いている空間だった。

「うん」二人で立ち止まった。座る場所はない。どこかに寄っかかっても、制服を土埃で染めることになる。

突然文奈が下を向いてうつむき始め、少し意味深な表情を作った。ぼくは胸の皮膚の裏を保冷剤で冷やされるような感覚がするほど不安になった。

そしてまた突然。

「あのさ、今ちよつとのぶに言うことがあるんだけど」

その雰囲気にはくは焦りながら、必死に平静を装いつつ答える。

「何、急に？」

背が低い文奈は上目遣いにぼくを見て、

「のぶ？ あたしが本物じゃないってことは知ってるよね。偽物でもないけど」文奈は、普段こうして目を見つめながら話すことはまずない。

「え……」文奈の目に常ならぬ思いを感じて、それに圧倒された。

「何も考えなくて、正直に答えてみて」

高まる心拍数を必死に心臓の奥底まで隠しながらぼくは口を開く。

「一応……ぼくがいる世界が本物じゃないってことは知ってたよ……」

まさか文奈がそう言うとは思わなかった」

「うん。未来のあたしが、今のあたしをつくってるんだよね」

ぼくは啞然とした。まさか言われるとは思わなかった。

そうして生まれた感情が悲しみとも寂しさともわからず、ぼくの目はいつもとより少しだけ潤った。

「じゃあ、未来のことも——」

「今のあたしは未来のあたしと同じ人じゃないけど……知ってることはあるよ」

そう小声で囁くように言いながら、文奈は声に出すことなく少し泣き出していったようだった。まぶたから一滴ぐらいの涙が溢れた。

「たとえば？」

「言うよ。のぶが知ってることばかりだろうけど。高校に上がってからあたしとのぶは全然話さないで、交流もない。ずっと会ってない。それでも、未来のあたしはずつとのぶのことが忘れられない。会えなくなってるも同然だけどいつか会おうと思ってる」

「あ、あれは……」

「あの気持ち。あの気持ちがあったから、これが完成したんだよ

「？」

僕は頭の中で思い出して、それが思い出せたことが嬉しくて、まるで背広を着たビジネスマンがゆっくり頷くかのように首を上下に振っていた。

「え？」 気になる様子の文奈。

ただ、その文奈がDNRというマシン自体を知っているかどうかはぼくにはわからない。

「何でもないよ。そこまでしてぼくに会おうとしてたのは薄々わかってるような気がしてた。文奈は人見知りするし、人と話すのは苦手だもんね」 ぼくは言って、近くの雀が飛び去っていくまでの数秒、文奈を見つめる。

「へ？ え？ 何見てんの、はずいよ」

「うん、文奈ならやりかねないってね。ちょっと思ってた」

「気になるよ……ん、のぶは？」

「何が？」

「未来ののぶのこと」

「未来のぼくはね、文奈とだいたい同じ。文奈のことを忘れられないですつとまともに恋愛できないでいる」

ほぼ直立のぼくの腕に、文奈が抱きついてくる。ジャージの赤いナイロン生地の手触りが滑らかで気持ちよかった。肩の近くには文奈の唇がさりげなく触れている。

「のぶ……可愛いなあ……大好き」

その言葉と一緒に文奈の口元が動くのを、ぼくは腕で感じた。

「ん……恥ずかしがり屋のくせに、こんな見られそうなところで……」

「そう言うのぶはどうなの？」

「……」 ぼくのほうが恥ずかしがり屋だったのか、何も言えなかった。

数秒の沈黙。体育館で余所の部活が練習をする音が聞こえる。バスケットボールが大地を踏みしめる音が。

「のぶ、ここで泣かせて……袖濡れちゃうかもしれないけど」

ぼくは黙りながら文奈の滑らかなショートカットヘアを撫でた。文奈の体が少し強ばって、ぼくを抱き締める力がほんの少しだけ強くなった。

「泣きたかった……の」といいながらぼくの腕にしがみつくように抱まる文奈。

「辛いんだ？」

「うん。えーと、明日は……。七月二十九日は？」

「誕生日だろ」とぼくが静かに言っていると、文奈は思い切り泣きたいと言いかのように、ぼくの腕を抱きながら呻いた。

その声はすぐに収まった。

「あの……その、ね。明日なんだけど」

何か悪い予感がして、「は？」とぼくは素っ頓狂な声を出してしまった。

「明日の夜ね……この映像が終わっちゃうの。のぶは現実の世界に戻って……あたしは……あたしは……死ぬことになる」

ぼくが黙りつづけていると、文奈が続けた。

「のぶからあたしが遠く離れると、この世界は終わる。自分たちでこの世界を終わらせないと、のぶは中途半端にこの世界から抜けて、現実には戻れなくなる」これぞ文奈のつくった、ずいぶんロマンチックなシャットダウンコマンド。

文奈と離ればDNRが終了するなんて。

どうしよう、そう思う前に、自分は何を言えばいいのか、何をすればいいのかもわからなかった。

ぼくはただ、この世界の終わりを受け入れたくなかった。

「明日、あたしがバスで遠くに行くから。ずっとここに居るのは……」

：無理。下手したらのぶも死んじゃう」

心の奥にもやもやした、どうしても表すことのできないストレスがあつて、返事できなくなったので何も言わなかった。

「いやだよね……でも、あたしはのぶを殺したくない。あたしが死んだほうがまだいい。現実世界なら、本物のあたしが生きてるし。返事して？」

文奈が言っていることは理解できる。でも、理由なくこの世界にいたかった。

「明日か。明日。明日ぼくは戻るんだ。明日ならもう考えごととして暇なんてないよね。ごめん」

「『ごめん』、なんて言わないで。罪悪感抱いたまま死にたくないの」

ぼくは自然に「ごめん」の一字一字目を言いかけて、「うん」という。

「少しの間だったけど、ありがとう。それと、向こうの文奈に代わって。また会おうね」

「文奈。とても楽しかった。だから、ぼくは悲しまないよ」

「ありがと……しばらく——いや、夜まで一緒にいよ」

どんな夢だつて、終わりがあつた。現実を見なければならぬ。そう自分に言い聞かせながら、ぼくの腕にいる文奈を抱いて目を瞑つた。いつ睡眠についたのかはわからない。どこで寝たのかも、起きたときにはわからなかつた。

昨日のように、太陽がこれ以上ないほど照っている昼頃。ぼくは文奈と、広い幹線道路の端にある、小さくて狭い歩道のバス停のそばに行った。

文奈は学校に行くわけでもないのに、セーラー服を着ている。本人曰く、「夏休みの昼に私服で外歩くんだつたらあつたのぶと一緒にいないといや」らしい。ぼくは不偏の私服。実に目立たないデザイン。

バス停に到着すると文奈は強くぼくの手を握ってきた。その力は強く、数分握られているだけでも疲れてくる。

「ちょっと痛いって。そこまで恐がるな、最後ぐらい」

「大丈夫だよな？ のぶはあたしのこと忘れないんだよね？」

「うん、当然だから安心しろって」

ぼくと文奈が言う言葉の一つ一つが死期の決まり文句のようで、儀式的だった。

死者を見送る儀式。いや、人が死者として変わるための儀式。

文奈が息をゆっくり吸い、

「ふう」といいながらゆっくり息を吐いた。息を吐いた後も、握る力は強かった。

バスのダイヤはよくわからない。バス停にも表示がない。だからいつそのときが来るのか、ぼくにはよくわからなかった。

本来はそれこそ死なのだろう。でも、この世界では常識が崩壊しかけている。それもあって、文奈の生に縋るために、一般的な死のみかたはしなくなかった。

でも残念ながらも、死は死以上でも死以下でもなく、この世界でも死は死でしかなかった。

しばらくして、文奈はぼくの手を軽く握りなおして、無言でぼくに寄り添ってきた。

文奈の体温を感じながら目の前を眺めていると、右から左に速く走る車が死までの時間を早めているようで恐ろしかった。奥に見える、反対車線を左から右に走る車は——文奈と少しでも長く一緒にいたい、ぼくの心を表しているようだった。

文奈と、ずっとこのままの状態でいられたら他のどんなことより幸せだと思った。

逆に、文奈とあと少しで別れることがこの上なく悲しかった。

時間には誰も抵抗できないとはよく言ったものだが、まさにその

通り、心の奥で予想していたとおりバスが遠くに姿を見せた。文奈は黙り込んでいる。しばらくしてバスがこちらへ車体を寄せつづばくと文奈の目の前に止まった。バスの雰囲気はまるで動物園で立ったまま動かない象のようである。

死ぬ前の儀式のようなことをしたかったのか、ぼくは握っていた華奢な手を放し、文奈を抱こうとした。文奈は照れくさそうに拒絶した。

「ごめん……最期の最後で……あたし、恥ずかしいんだもん。あたしも抱きしめたかったけど……ごめん……もう抱きしめられなくなるってのに」

「あ、文奈……」文奈の言葉にぼくはしどろもどろした。文奈もぼくも、死を前にしたショックは大変なものになっている。

急に辺りが静かになって、その中でぼくの鼓動と文奈の鼓動、風の流れが強調されたようによく聞こえた。

チープでレトロなブザーが鳴って、バスのドアが開いてから、文奈のまぶたから今日初めての涙を溢れた。

今まで強がっていた様子の文奈が涙を流し、それがぼくにはとてもなく可愛く見えた。

残酷なことにも、最期が恐ろしいほど可愛く見えるなんて。不謹慎なことに、人を殺す人の気持ちがわかった気がした。

愛する人の死を目前にするところまで精神がおかしくなるとは。

「……好き……大好き……だから、あたしのこと忘れないで……」

文奈が泣き始めたことがわかる、鳥が鳴くような声。

これは現実の世界で中学を卒業するとき、文奈が言ったのと全く同じ台詞だった。

「あたしは絶対に忘れない」と、さっきとは変わって泣いていることを隠すように落ち着いた口調で言った。

歩道のコンクリートに一滴の涙が滴った。

文奈が目の周りを濡らしている涙を拭い、無理に笑顔をつくってぼくを見つめた。ぼくが「もちろん忘れない」というと文奈の笑顔

は眩しくて自然なものになり、悲しさを棄てた顔でバスのステップを一段一段と上がっていった。

「天国でも……ずっと待ってるからね……ずっと……」

また会おうね。

もう会えないなんてことはないよね、これが最後の再会だとしても」

ぼくの脳裏には文奈と初めて会った日の情景が浮かび、その情景から今までの時間を思うと悲しくなった。この世界から抜け出すことがひたすら悲しかった。

現実で、無口だった文奈と付き合い始めてから、彼女が言った言葉は、一つ一つが今もぼくの頭の中に鮮明に残されている。

次のこれが、現実世界でぼくが聞いた文奈の別れ際に言った最後の声であり、仮想世界でぼくの聞く文奈の死に際に言った、おそらく最後の声だ。

最後の。

「じゃあね！　ばいばい！」その声がしたときには、文奈はぼくからは見えない場所で座っていた。

いつも物静かで温和しい文奈にはひどく似合わない元気な声だった。その声がバスの中から聞こえて、ぼくが何か返事しようとした瞬間にドアは閉まった。ふと足許に視線を下ろすと、涙は乾ききっていた。

アイドリングストップをしていたバスのエンジンがかかり、黒い排気ガスを出しながら発った。次第に遠ざかっていくバスを見ると悲しくなりそうで、だからすぐに後ろを向いた。

ぼくにとって長い時間が過ぎて、バスの走る音は聞こえなくなっていた。気付けば、それ以外の車が走る音も聞こえなくなっていた。

そうして仮想世界の千葉文奈は、十三歳の誕生日に、その短くて長い人生を終えた。再会した文奈が死んだ。

ぼくは感じたことのない、何か苦しさを感じた。

かといって、その苦しさはぼくにとって悲しいのかも、寂しいのかも、恨めしいのかもわからなかった、

醒めたときの辺りが全面真っ白になっている光景は、まるで想像上の天国のような虚無に包まれていた。

4章 **guilty**(Aug 1st, 2009)

n. **【guilty】**

1 「…の」責任がある

2 犯罪的な、罪となるような

文奈が消えた。ぼくの目の前から。それでも文奈はいる。ぼくの頭の中と、この世界に。

文奈は今、何をしているかも分からない。前にも言ったとおり、音信不通状態なのだ。もしかしたら、今頃は別の男と結婚しているのかもしれない。

それでも、ぼくは文奈のことを好きでいる。文奈をあくまで過去の記憶としてでもいい。別にこれから無理に会うつもりはない。

何故なら、ぼくはずっと、彼女があまり見せなかった笑顔を容易く思い出すことができるからだ。

現実に戻ると、スクリーンフィールドは跡形無く消えていた。

ぼくの頭からもDNRが外れ、部屋はDNRが届く前の状態に戻っていた。

壁掛け時計はもう見ない。今は見る必要がないように感じたからだ。

ぼくは何かに駆られた。ぼくが何かをしなければならないという使命感に駆られて。

文奈の望んでいたことがわかった気がして。

気付けばぼくの体は意識せずに動き始めていた。

探そう。文奈を。もう一回でも再会するために。

(22..57) 東京で男性自殺、ほぼ同時刻に近くに住む女性が自殺

1日午後十時頃、東京都練馬区で、会社員の清水裕信さん(26)が自宅マンションで首をつり、死亡した。

警察によると、地元住民が不審な物音を聞き、警察が駆けつけて部屋を確認したところ、中で男性がロープで首をつって死亡していたとのこと。遺書はなく、原因は不明。

また、ほぼ同時刻に、同じく東京都練馬区に住む会社員の千葉文奈さん(26)が首をつり、死亡が確認された。原因は不明。

清水さんと千葉さんが同じ小中学校の出身であり、また同じ会社に勤めていることから、警察は自殺の原因と二人の周辺関係について調査を急いでいる。

日時..2009/08/01 00..01

差出人..”千葉文奈” <a-
chiba@yoda-elect
ric.co.jp>

宛先..”清水裕信” <h-
shimizu@yoda-ele
ctric.co.jp>

件名..DNR-0081について

DNR―0081の開発を担当しました千葉と申します。

……なんて言うのも変だから敬語は使わないことにするね。

覚えてるかな？ あたしのこと。

小学校の頃からノブのことが好きだった「千葉文奈」だよ（笑）

覚えてなかったら、卒業アルバムの裏背表紙に何か一言書いてあるはずだから見てみれば分かるかも。

やっとメールが送れるようになった。今までノブにメールするのはなんか照れくさくて出来なかった。同じ会社だし、アドレスは知ってたんだけど。

突然だけど、今回のことについて出来るだけ短く説明するね。

あたしはこの間人づてに、ノブが同じ会社にいるって知って、そのときちょうど開発途中だったDNRを少し改造して、それを利用してノブと会おうと思った。説明書の一言そのまんま、ノブと会うためにあたしはこれを作った。

上にバレたらたぶん会社にいらなくなるし、覚悟は必要だったけど、今ノブと会う手段はこれしかないと思って、思い切ってやった。

あたしは昔の、対人関係が苦手な性格のままだから、とても自分からは行きづらかった。ノブのほうから来てほしかった。

望んでもノブにはそれが伝わらない。だからあたしは頑張った、伝わるように。

計画は順調に進んで、ほぼ完成したからノブにDNRを送った。

DNRの映像は、ノブの思考や記憶にも少しは影響されるように出来てるけど、ほとんどはあたしがプログラムしたもの。それを観てもらいたかった。

でも、送った後のソースコードで重大な、デバッグが困難なバグがあることを知った。

映像の最後であたしが死ぬこと。

それによりノブが自殺するかもしれない。プログラムが自然発生的に生まれていたこと。

映像に、ノブがあたしに会いたいと思えるような、思考操作のプログラムオブジェクト自体が抜けていたこと。

信じられないと思うけど、最先端のコンピュータには意外と起るの。奇想天外な失敗。

これは大きな失敗だった。DNRをつくった意味がなくなるってことだから。

あたしはずっと、大声を出して泣いた。あたしが大声を出して泣くことなんて見たことないよね。そんなことなかったし。

中途半端だけど、これで今に至るってところかな。

あたしはとにかく悲しんだし、ノブを殺すことにもなるかもしれない。なかったから、その罪を命をかけて購うことにした——自殺することにした。こういうことは簡単に言っちゃいけないのは知ってるけど、今のあたしは本気。

このメールはいろいろ仕込んで、八月一日に届くようにした。その頃にはあたし、もうこの世にいないと思う。もしかしたらノブも……

最後に。ノブがいない人生はとてつまらなかった。毎日ずっとノブのことを想ってた。こんなしつこい女の子でごめんね。

ノブが好きすぎて他の男と付き合っても全然集中できなかった。

顔文字も何も使わないで不器用だけどこめんね。

天国でまた会えるかな？

じゃあね、ばいばい。

千葉 文奈

Ayana Chiba

a-chiba@yoda-electric.co.jp

http://schwarz-engine.org.uk/~

rapatrol/

1. 11411888...@docomo.ne.jp

— — — — —
End — — — — —

4章 **g u i l t y (A u g 1 s t. 2 0 0 9)** (後書き)

各話冒頭の英単語解説は『ジーニアス英和辞典第3版』（大修館書店）を参考にしました。その著作権は、『ジーニアス英和辞典第3版』の著作権者に帰属します。

付録 説明書（前書き）

文中に登場した「説明書」です。

付録 説明書

説明書

DNR-0081B

DNR-0081W

DNR-0081S

このたびは当社製品をお買い上げいただき、まことにありがとうございます。

この製品を末永くご愛用いただくために、この説明書をお読みいただき、正しい使い方でご製品をお使いください。

※当社は、本製品の使用誤り、ご使用中に生じた故障不具合によって受けられた損害について法令上の賠償責任が認められる場合を除き、一切その責任を負いません。

また、この製品は改良のため予告なく仕様などを変更することがあります。

まず、部品が揃っているか確認してください。

内容物…本製品一式（ヘッドマウント、スクリーンフィールド、電源アダプタ）、取扱説明書（本書）、『安全にお使いいただくために』、保証書

危険…本製品をお使いになる前に、別冊の『安全にお使いいただくために』を必ずお読みください。

警告…スクリーンフィールド内には、一切の機械を持ち込まないでください。内部に混沌が発生し生命に危険を与える場合があります。

1―蚊帳型スクリーンフィールドを設置し100V50／60Hz電源をスクリーンフィールドに接続してください

2―スクリーンフィールドの中に入りフィールドの密閉を確認してから本製品を頭から深くかぶってください

3―かぶってから三分後に、映像が流れ出します寝付くときのように、何も考えず、映像と音声に身を委ねてください

※本製品は一度動き出すと緊急停止を除いて二時間の間止めることは出来ません

材質

本体・外装…

ポリカーボネート

スクリーンフィールド・スクリーン部…

ナイロン70%、綿20%、ポリエステル10%

スクリーンフィールド・支柱部…

アルミニウム、ポリカーボネート

スクリーンフィールド・他…

ステンレススチール、真鍮

本社では一切の問い合わせ、修理を受け付けていません。

株式会社依田電機
検針…千葉

あの気持ちがあるから、これが完成したんだよ？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8488h/>

二回目の再会

2010年12月29日14時04分発行